

# 羅漢の如くに

——講演を聴いて——

作家 松本富生

(日本ペンクラブ会員)

去る四月十八日、黒田武志君の、「心やわからに今を生きる」という演題のもとでの講演を聴いた。その折りの、私なりに感じた幾つかのこゝとを記してみたい。

栃木県々北の中心都市とも言える、人口五万余の大田原市に県立大田原高等学校がある。黒田君と私はその高校の、昭和三十一年三月に卒業した同期生である。同校は明治三十五年に栃木県立大田原中学校として創立され、昭和二十三年には新制度のもとで栃木県立大田原高等学

校として生まれ変わって九十五年の歴史を刻みつつ今日に至っている。「質素堅実」を校訓として、今日まで一万九千余の卒業生を世に送り出し、各界に著名な卒業生がいる。

毎年四月十八日には創立記念式典が開催され、その折りに、その道に於いて名の通った卒業生が記念講演を行うならわしがある。黒田君は新制の第八回卒業生では、現ニューヨーク州立大学教授の伊藤博君に次いで二人目の講師としての榮譽を担った。

私たちが卒業した昭和三十一年という年は、政治的には日ソ共同宣言（日ソ国交回復）が行われ、日本の国連加盟が決まった年であり、経済的には神武景気が云々された時でもあった。文化的には週刊誌ブームの始まった年であり、その前年の昭和三十年には、「もはや戦後ではない」という言葉が生まれた。経済的・社会的状況を背景として戦後世代の最初の自己主張として世間の注目を集めた、石原慎太郎の小説『太陽の季節』が芥川賞を受賞した。いわゆる「太陽族」という言葉がはやり、「慎太郎刈」というヘアースタイルが若者達の間で流行した。

しかし、そう言った現象は経済的に恵まれた都会派の若者達の間でのことであり、私たち田舎出の苦学生には無縁の世界でもあった。

黒田君は講演の冒頭に於いて、「四十数年前のことを様々に思い浮かべると感慨無量たるものが迫って来る」と言つてその面立ちを紅潮させ

ていた。その心底には、貧しさの中での青春時代の様々な呻吟の思いがよぎっていたのかもしれない。

多くの来賓の先輩方と私たち八回卒の同期生、千名近い生徒達を前にして、黒田君はやや緊張の面持ちで話しを進めていた。母校にかかわる多くの人々の前で講演をするという気負いがあったことは当然のことであろう。

「一期一会という言葉があるけれども、私達君達を前にして話しをするのは今日が最初で、かつ、最後かもしれない」と、生徒達に眼差しを向けて黒田君は言った。だから、私の言うことによく耳を傾けよ、という念おもいがあったのに違いない。生徒達は静かに聴き入っていた。中にはねむってしまったている生徒もいたが、それは多勢の中での一つの姿であり、致し方ないことではあった。

黒田君は生徒達を諭すさとように話しかけてい

た。その表情は喜怒哀樂の色ゆたかに、時には喜びの情に齒を白くし、時には怒りに燃え立ち、或る時には涙を浮かべんばかりに哀しげであり、そして、時には樂しげでもあった。

私は黒田君の様々な表情を見ていて、ふと、かつて埼玉県のある高等学校に講演に出かけた日のことを思い起こしていた。生徒達に私の話したことが理解出来ていたのかどうかと思いつつ、どいつの歸路に立ち寄った、寄居町の小林寺の五百羅漢の様々な姿を思い出していたのだ。

幾多の羅漢像の、ある者は天を仰いで腹をかかえて笑っており、ある者は地に目を落としてもの哀しげであり、ある者はおどけて踊っているようでもあり、そしてある者は苦行の様にあったり、怒りをあらわにしている者もあった。山頂に至る道に座している（或いは横になっている）様々な羅漢像は現世の私たちの、生きとし生けるものたちそのものの姿でもあろうと思



った。私に似ている羅漢像もあるような気がした。黒田君に似ている羅漢像も、私の記憶の中から甦つて来ていた。羅漢の様々な姿で黒田君は生徒達に語りかけていたのだ。

黒田君は托鉢僧としての修行時代の苦しかったことごとを話していた。十円のパンを食べ、十六円の銭湯で埃まみれの身体を洗い、一合三十八円の酒を飲んだ時代のことである。極限とも思える経験が基もととなっていたのであろう。人間は精一杯生きればどんなことがあつても絶対に死にはしないのだと力をこめて言った。

四苦八苦することが人生であるとも言った。

四苦八苦とは、人生の、考えられる限りのあらゆる苦しみのことを意味する。仏教に於いては、人生に於ける生・老・病・死の四苦に、愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦の四苦とを合わせて八苦と言うのだが、生徒達には少々難解なことであつたのかもしれない。

どうしたら四苦八苦を取り除くことが出来るだろうか。

人間は本来百年単位で生きられるはずで、その、生きている過程に於いて答えをさがし出せばよいのだと言った。

人生とは、何が不幸で、何が倖いするのかわからない。つまり、人間万事塞翁が馬であるとも言っていた。古代中国に於ける五胡十六国の時代、国境の塞の近くに住んでいた翁おきなの馬が胡の国に逃げて行ってしまった。数ヶ月もたつてからのこと、なんと、その馬が胡の国の名馬を連れて帰つて来た。翁の息子が喜び勇んでその名馬に乗つたのだが、どんな弾みなのか息子は馬から落ちてしまった。それで足を悪くしてしまつたのだ。その一年後のこと、胡人が攻め込んで来た。国中の若者は皆戦いに出て戦死してしまつたのだが、翁の息子は足を悪くしていたので兵役を免れていて無事であつた。人生に

於ける禍福・幸不幸は変転して定まりのないものであるという喩話を語った。

黒田君は故事を借りて無常なる人生哲学を生徒達に話しかけ、更に、世阿弥の能の世界でもある「姥捨山」の伝説を引き出した。

昔話に於ける姥捨伝説は日本全国至る所にあり、その基本的な筋立ては決まっている。村里に於いて、年老いた者はある年令に達すると口べらしのために人里離れた山奥の地に、その子によって捨てられてしまうという内容である。

地方によって基本的な筋立ては変えないで、小さな所では内容が少しずつ異ってしまうのだが、黒田君が生徒達に話した伝説は次のようなものであった。

昔、ある若者が口べらしのために山奥に捨てようと、年老いた母親を背負って奥へ奥へと分け入って行くのだが、背中の老婆は道々小枝をポキリ、ポキリと折っていた。若者は母親のそ

のような仕種をいまましいと思っていた。せつかく山の奥深くに分け入っているというのに、母親自身が帰るための道しるべをしていると若者は思ってしまったのだ。若者でさえ帰るべき道がわからなくなってしまふほどの奥深い所に辿り着き、母親を背中から降ろした所、母親は若者に次のように言った。「ご苦労だったね、お前が無事に帰ることが出来るように、道々に小枝を折って道しるべを作って置いたので、暗くならないうちに早くお帰り」と言ったのだ。若者自身が無事に帰ることが出来るようにと作った道しるべと知った息子は、己の心の浅はかさを思い知らされ、ただただ絶句するのみだった。

その所を黒田君は羅漢のごとくになって感動的に語り、会場は静まり返っていた。人生とは思ふようにはならないのだ、曰く言い難いほどにつらいことがあるものだと、つまり、四苦

八苦するのが人生なのだと言ふと黒田君は語りかけているようであつた。そして又、子に対する親の愛情とはまさにこのように切ないものであると。

人間は傲慢になつてはいけないとも説いた。

何事もほどほどの所で、中道・中庸が仏教の教えでもあり、たとえば、才能があつてあれもこれもといろいろなことをすると、人はどうしても傲りたかぶつた心になつてしまふ、いまし誠めなければならぬことだと言つた。

終りの頃になつて黒田君は、「日常の五心」なるものに言及した。

一、すみませんという 反省の心

∴ (以下略)

各々の心のありかたが現代の子供達に欠けているものであり、翻つて考えると私たち大人の社会に於いても欠けているものであり、改めて考えさせられる「五心」であつた。演題の「心やわからかに今を生きる」には、この「日常の五

心」が大切なのだということを学ばせられるひとときであつた。

以上、黒田君が講演した内容の概要を記してみたが、生徒達を前にして語つたものとは筋立てが相前後するものがあつたり、私なりの解釈を加えてみたりで、必ずしも講演を忠実に記した訳ではない。その上で私が記述したことが黒田君の講演の趣旨を削ぐものでないことを念じながら、多くの後輩達に人生に於ける教えの一つを説いたことに私なりの感謝の心を黒田君にささげたいと思う。

講演終了後、既に還暦を迎えた私たち同期生の二十数名の者は黒田君を慰勞すべく塩原温泉郷に集い、旧交を暖め合い、回顧の話に花を咲かせたのである。横浜善光寺の住職として、また、二十一世紀に生きる仏教徒の育成を目的とした海外留学僧育英会の理事長としての黒田武志君の今後のさらなる活躍を祈つてやまない。